

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：24402

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770088

研究課題名(和文) 近代説話の研究 - 明治大正期の実録、実記、講談本から歴史小説、大衆文学へ -

研究課題名(英文) Study of "modern narration" - from JITSUROKU, JIKKI and KODAN of Meiji Taisho era, to historical novels, popular literature -

研究代表者

奥野 久美子 (OKUNO, Kumiko)

大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：50378494

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：ほぼ申請時の年次ごとの研究予定の内容を、4年間の研究期間内に遂行することができた。順序は予定とは前後したものの、研究予定として申請書に記入した一休宗純、細川ガラシャ、石川五右衛門といった人物の近代説話生成を明らかにできたほか、研究予定には入れていなかった平中説話(平貞文)、俊寛僧都の近代説話についても研究成果をあげることができた。ほかにも公開講座で木曾義仲の近代説話を研究発表した。

具体的に形になった成果としては、研究期間内で、図書収録論文1本、雑誌掲載論文5本(入稿済み、掲載予定のもの1本含む)、学会発表2件である。

研究成果の概要(英文)：I was able to almost accomplish study planned contents every annual at the time of the application within the study term of 4 years. I was able to clarify "modern narration" in Sojun Ikkyuu, Hosokawa Garasha, Ishikawa Goemon; about these I filled out the application as the study plan, although it was mixed up with the plan. In addition to these, I studied about Sadabumi Taira, Shunkan, and I read a paper at an open lecture, about Yoshinaka Kiso.

As the result that became the form, it is one book collecting article, magazine publication article five; include one publication planned thing, and two conference presentations, during the study term.

研究分野：日本近代文学

キーワード：近代説話 実録 講談本

### 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、近代以降に活字出版された実録、実記、講談本、歴史小説(史劇を含む)大衆文学によって受け継がれ変容していった伝説のことを近代説話と名づけ、本研究での研究対象とした。

小野小町、豊臣秀吉、水戸黄門、鼠小僧、国定忠次など歴史上(時には伝説上)の有名人物に対するイメージは、中古中世には説話や物語を通して生成され、江戸期には実録、講談、芝居(浄瑠璃、歌舞伎)を通して広まった。近代には、芝居や講談も引続き人気の芸能ではあったが、出版文化が江戸期以上に花開き、明治20年前後には江戸期の実録や、それをもとにして多くは絵を入れた実記が数多く活字出版された。明治30年前後からは講談速記本の出版が始まり、大正、昭和に至るまで幅広い層から人気を得た読み物であった。

つまり近代には、歴史、伝説上の人物イメージは活字出版された実録、実記、講談本によって広まった。そして大正期には文壇でも歴史小説や史劇が流行し、武者小路実篤「日本武尊」、芥川龍之介「鼠小僧次郎吉」、菊池寛「入れ札」(国定忠次もの)など多くの作品が生まれた。さらに大正末から昭和にかけては、長谷川伸、大仏次郎、白井喬二らの長編歴史小説が大衆文学として隆盛し、人物イメージは新しいメディア、映画でも再生産されていく。

このようないわば文化現象を近代説話と定義するとき、その生成過程を個別の素材ごとに丹念にたどってゆくという研究はこれまでなされていなかった。

### 2. 研究の目的

本研究では、大正期の歴史もの小説・戯曲を中心に、実録、実記、講談本にさかのぼって伝説の出所と変容を明らかにした上で、大衆文学へのつながりを検証し、明治大正期における近代説話の生成過程を明らかにすることを目的とした。日本近代文学が文学という狭い範囲だけで論じられるものではないことを実証し、日本近代文学史観に新たな地平を拓きたいという意欲をもって研究に臨んだ。

具体的な歴史上の人物や大正期歴史小説作品を定め、その近代説話の生成を明らかにする目的のためには、膨大な資料を調査する必要があるため、4年で3~4件の対象を研究し、年に一本は論文や学会発表で成果をまとめることを目標とした。申請時に、具体的な研究対象候補として、武者小路実篤「或る日の一休」や堺利彦「一休和尚」がある一休宗純、芥川龍之介「煙管」の河内山宗俊、同じく芥川「糸女覚え書き」の細川ガラシャ、上司小剣「石川五右衛門」の石川五右衛門を挙げた。

### 3. 研究の方法

研究方法としては、研究代表者が本研究開始以前から行ってきた研究方法と同様に、対象人物に関する歴史小説、実録、実記、講談本、大衆文学のリストを作成し、1点ずつ調査し、概要をカードに筆記して集め、それら进行分析、考察し結論を導く、という方法でおこなった。

本研究のような資料渉猟型の研究では、資料を集めることそのものに多くの時間と労力を割くのが常であるが、本研究においても同様であり、資料収集にはWEBやDVD、古書を駆使して効率を高め、また図書館や古書店にない資料も、先輩研究者の助けを得て貸与してもらうなどして調査した。特に、後掲(雑誌論文)の「堺利彦の社会講談「一休和尚」と明治大正期の一休もの講談本 武者小路実篤「或る日の一休」に触れつつ」の研究に際しては、一休関係の講談本がとても全ては追い切れないほどに膨大に存在し、また、WEBで見られる資料に落丁があったりのトラブルもあり、資料収集にたいへん困難を感じた。しかし、研究者であり講談本の収集家としても知られる三人の諸賢のご協力を得て、なんとか研究を全うすることができた。

### 4. 研究成果

ほぼ申請時の年次ごとの研究予定の内容を、4年間の研究期間内に遂行することができた。順序は予定とは前後したものの、研究予定として申請書に記入した一休宗純、細川ガラシャ、石川五右衛門といった人物の近代説話生成を明らかにできたほか、研究予定には入れていなかった平中説話(平貞文)、俊寛僧都の近代説話についても研究成果をあげることができた。ほかにも公開講座で木曾義仲の近代説話を研究発表した。

論文として発表した研究成果について、発表順に具体的な内容と意義を以下に記す。

(1)後掲の〔図書〕欄にあげた、論文集収録の論文「糸女覚え書」 烈女を超えて」は、ガラシャを主人公とした芥川龍之介の「糸女覚え書」(「中央公論」大一三・一)の作品研究である。この研究は2013年度に行った(2013年度内に入稿、刊行は2014年4月)。本研究課題の申請時、ガラシャについては平成26(2014)年度の研究対象として取り上げる予定にしていたが、ちょうど「糸女覚え書」での原稿執筆依頼があったため、急遽こちらの研究テーマを2013年度に取り上げた。明治大正期の細川ガラシャをめぐる諸言説を、小説、戯曲、偉人伝、史伝、教訓書などジャンルを問わず検証し、芥川独自のガラシャ像がどこにあるのかを結論づけたものである。明治以降の近代説話がガラシャを烈女として描き、持ち上げるのに対し、芥川のガラシャ像はそれらとは違う一人の女としてのガラシャであることを明らかにし、近代説話の一端を明らかにできたとともに「糸女覚え書」の読み直しにも寄与できたと考える。

(2)次に後掲〔雑誌論文〕の「芥川龍之介「好色」の自画像」では芥川龍之介の「好色」(「改造」大10・10)の主人公である平中の説話に着目し、芥川独自の平中像をさぐるべく研究を行った。ただ、現在の平中説話の中心となる「平中物語」は昭和初期に発見されたもので、芥川の生前、平中好色説話は今昔物語集等で知られるのみであった。従って、同時代の平中 近代説話 の検証はできなかった。そのため研究方法を変え、本作では主人公が典型的近代知識人として描かれていることに着目し、明治大正期の知識人像と平中を重ねる形で検証し、本作の平中像を導き出した。「大導師信輔の半生」など、後の芥川作品にもつながる、新たな「好色」の読み、大正期知識人としての 平中近代説話 を明らかにすることができた。

(3)後掲〔雑誌論文〕の「芥川「俊寛」と『攷証今昔物語集』」では、研究の対象は、「平家物語」から現代まで、さまざまな文学や演劇に取り入れられ、説話 化された人物の代表ともいえる俊寛僧都であった。俊寛を芥川龍之介が描いた短篇「俊寛」の作品研究として取り組み、芥川がどのような伝説をもとに独自の俊寛像を造型したかを明らかにした。芥川が愛しよく利用した説話集「今昔物語集」のうち、明治期に刊行されていた『攷証今昔物語集』が重要な材源となっていることを論証し、古典説話から 近代説話 への具体的つながりや展開を解明することができた。

(4)後掲〔雑誌論文〕の「石川五右衛門ものの明治大正期における展開 実録・講談本から小説・戯曲へ」では、石川五右衛門の 近代説話 を、近世の実録を起点とし、明治大正期の実録本、講談本から探った。上司小剣の石川五右衛門もの小説と戯曲の出典が大正期の講談本であることを論証できたほか、檀一雄の直木賞受賞作「真説石川五右衛門」や、白井喬二の「石川五右衛門」など、昭和の戦後になってからの大衆文学へのつながりも、詳しく論じる紙幅はなかったものの、示唆することができた。さらに現代演劇の「GOEMON」にまで通ずる要素も指摘した。本研究課題の成果のうちで、近世の実録から近代の実録本、講談本、さらには大衆文学へ、という 近代説話 の展開を、もっとも明確かつ的確に跡づけられた研究は、本研究論文であると自負している。

(5)後掲〔雑誌論文〕の「芥川龍之介文庫の明治期実録本 『開明奇談写真之仇討』『女盗賊峯の邦松』」などは、2015年12月に大阪府立大学にて「作家の参考書 - 芥川龍之介を例に - 」と題して、「今昔物語集」や近世の戯作、明治初期の実録と芥川文学の関係について研究成果をもとに講演した内容

をもとに、研究をすすめた成果である。歴史上のいわゆる有名人の 近代説話 だけではなく、無名の市民が起した実際の事件や、多くのフィクションの事件も、実録という形で物語化されて 近代説話 化することがある。この研究では、そのような例を芥川龍之介文庫にある明治期実録本から研究した。 近代説話 の、これまでの研究とは別の一面を明らかにできたものと考えられる。

(6)後掲〔雑誌論文〕の「堺利彦の社会講談「一休和尚」と明治大正期の一休もの講談本 武者小路実篤「或る日の一休」に触れつつ」は、未刊行のものであるが本研究課題最終年度である2016年度中に入稿し校正も済ませている論文である。堺利彦の社会講談である「一休和尚」の出典調査を中心に据え、武者小路実篤の「一休和尚」にも触れつつ論じたものである。明治大正期の講談本を中心にしたが、中世からはじまり江戸期に多く刊行された一休説話も視野に入れ、膨大な一休関連文献を参照、分類整理して、一休の 近代説話 を明らかにした。それでも、一端を明らかにしたにすぎない、と言わざるをえないほど、一休説話は膨大である。紙幅の都合で武者小路実篤の一休ものについては大正期までに限らざるを得ず、昭和以降の実篤の一休ものについては今後の研究課題として残した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

奥野久美子「堺利彦の社会講談「一休和尚」と明治大正期の一休もの講談本 武者小路実篤「或る日の一休」に触れつつ」;『国語国文』第86巻第6号(査読有) 2016年12月入稿済み、2017年6月掲載予定。

奥野久美子「芥川龍之介文庫の明治期実録本 『開明奇談写真之仇討』『女盗賊峯の邦松』」;『文学史研究』第56号(査読有) 159~167頁、2016年3月

奥野久美子「石川五右衛門ものの明治大正期における展開 実録・講談本から小説・戯曲へ」;岩波書店「文学」(査読無、依頼稿)第16巻第4号、210~226頁、2015年7月

奥野久美子「芥川「俊寛」と『攷証今昔物語集』」;『芥川龍之介研究』(査読有)第9号、11~22頁、2015年7月

奥野久美子「芥川龍之介「好色」の自画像」;京都教育大学「国文学会誌」(査読有)第41号、1~15頁、2014年7月

〔学会発表〕(計2件)

奥野久美子「「好色」から「大導師信輔の半生」「或阿呆の一生」へ 芥川の自画像」京都教育大学国文学会(2013年7月27

日、於京都教育大学（京都府京都市）  
奥野久美子「芥川「俊寛」の伝典」第9回  
国際芥川龍之介学会（2014年8月26日、於  
リュブリャナ大学（スロベニア））

〔図書〕（計1件）

奥野久美子「『糸女覚え書』 烈女 を  
超えて」；宮坂覺編（総執筆者数 52 名）『芥  
川龍之介と切支丹物 多声・交差・越境』（査  
読無、依頼稿）翰林書房、総頁数 571 頁、  
奥野久美子担当箇所 318-329 頁、2014 年 4  
月

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

奥野 久美子 (OKUNO, Kumiko )  
大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授  
研究者番号：50378494